クラブ野球選手権 マツゲン箕島 ㊦

若手底上げ チームに勢い

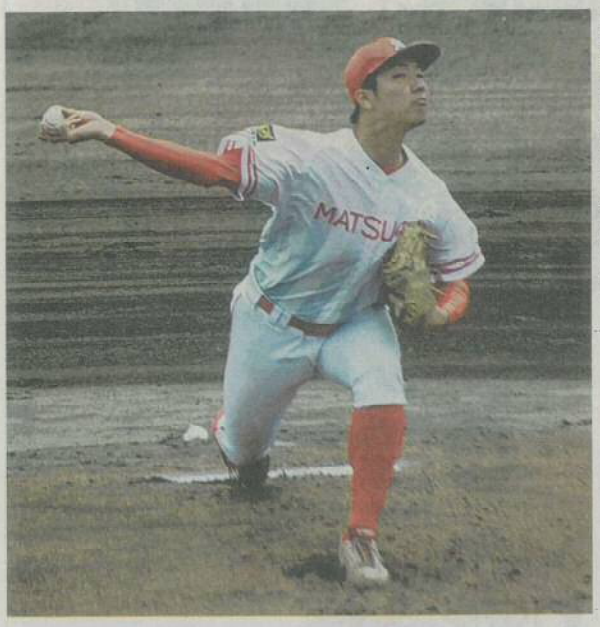
主砲・エース 顔ぶれ一新

全日本クラブ野球選手権大会に出場するマツゲン箕島。チームにとって、今回は試金石となる大会でもある。2019年の前回大会（20年は中止）で優勝した際に活躍した不動の「4番打者」と「エース」が、最近2年間で相次いで引退したためだ。

主軸担い迷い消え

ただ、柱を失っても西川忠宏監督(60)に不安はなかったという。「二つのポジションが空いたことで、チーム内で競争が起きると思い、期待していた」。それに応えたのが、新たに4番に固定されるようになった山口輝内野手(25)だった。

以前から長打力はあったが、難しいコースに手を出し、打ち損じることが多かった。それが21年は主軸を託されたことで、「自分のできることをやろう」と迷いがなくなったという。「カウントが追い込まれるまでは、じっくり甘い球を待つ」と決め、好球にしっかり反応して振り切れるようになった。チームは俊足ぞろいで機動力が看板だが、西川監督は「4番が固定すると打線に1本筋が通って、戦略も立てやすい」と頼りにしている。



練習試合で力投するマツゲン箕島の森億投手＝有田市で

大舞台のキーマン

一方、投手陣も若手が底上げされた。松尾大輝(24)、坂田颯(23)、森億(23)の3投手だけでなく、抑えの竹中諒投手(23)らリリーフ陣も豊富だ。森投手は20年春先、胸回りから肩が張る胸郭出口症候群で出遅れ、その後も一時15キロも体重が落ちたり、肉離れなどに悩まされた。だが、体質改善やフォームの試行錯誤で徐々に力を付けて調子を上げ、現在は欠かせない戦力になっている。右横手からのストレートに威力が増したことで、変化球も効果的に使えるようになった。大舞台でキーマンとなりそうで、森投手は「チーム内で信頼される存在になりたい」と話す。

新人10人が加わったことも刺激となっており、冨樫和秀主将(26)は「若い選手が増えて、勢いのあるチームになった」と本番を前に手応えを感じている。

クラブ野球選手権は岐阜県で29～31日に開催される。優勝すると、6月に開幕する第46回社会人野球日本選手権大会への出場権が与えられる。更なる飛躍への足がかりをつかむためにも、マツゲン箕島は優勝を目指して大会に臨む。

【加藤敦之】